

Consultants

建設コンサルタント誕生・成長の昭和



小田 秀樹

一般社団法人建設コンサルタンツ協会 常任理事

昭和20(1945)年に第二次世界大戦が終結するまでの日本は、明治・大正時代からの意識に引きずられるとともに、大東亜共栄圏を目指し、欧米諸国に対抗する国力の構築に邁進していた時代であった。その時代の土木分野に携わる人たちは、国内はもとより、管轄していた朝鮮・台湾・旧満州(現在の中国東北地方)等で、電力・鉄道・道路・水資源確保・都市計画など多岐に亘る社会資本構築に向け、活躍していたと聞いている。

終戦を迎え、海外で活躍していた技術者たちが引き上げて来て、国内で活躍していた技術者と共に、戦後復興や新たな社会資本の整備に携わることとなった。戦後もなく設立された建設技術集団の大半が国策による法人組織であったが、その後民間会社として自立することとなる。

建設コンサルタントの誕生もこの時期だ。各種の調査・設計が行政側からアウトソーシングされる量が昭和30年代には急速に拡大し、職業としての建設コンサルタントの役割が、高度経済成長を支える一翼を担ってゆく。当時の主な業務は調査設計であり、インフラ整備の基本計画である交通計画や都市計画などは、まだまだ行政側で行われていた時代でもある。

この時代、高度経済成長を実現し昭和36(1961)年に『所得倍增計画』を打ち出したのが、わが地元・広島出身の故池田勇人総理大臣である。名神高速、新幹線、首都高速等が開通し、東京オリンピックが開催された昭和39(1964)年に体調不良により退陣するが、この頃が、急速に日本経済が成長する始まりでもあったと記憶している。

私が入社した昭和50年代前半、設計部門においてはドラフターによる図面作成、卓上計算機による構造計算や材料計算、手書き報告書作成が常識であった。図面も計算書も青焼き製本で成果を作るため、トレーシングペーパー・第二原図なるものを使用していたことも懐かしい。また、弊社に

もタイプ室という組織があり、報告書の一部はこれで納めていたことも思い出す。

平成時代は事務作業を電子化するOA化の波が押し寄せ、図面はCAD、報告書や計算書はワープロからパソコンを使用したワード・エクセルへと変革してゆき、各種機能を利活用した成果品となってゆくのであるが、昭和の時代に現在のBIM/CIMは想像もしていなかった。

また、昭和48(1973)年と昭和55(1980)年の二度にわたるオイルショックを経験したものの、基本的に伸びることしか知らなかったこの業界が、平成の時代にバブル崩壊や公共事業削減の影響を受けるとは、誰もが夢にも思わなかっただろう。

現在は、昭和30~40年代の高度経済成長期に造られた多くの施設が、今や新たな更新を必要とする時代となったが、これらが国民生活の向上や経済発展に寄与してきたことは事実であり、リニューアール・リペアー・メンテナンスによりこの時代の施設を守ることも重要である。同時に、次世代へ残してゆく優良な社会資本を、新たな視点で整備・提供してゆく必要性を感じている。

昭和の有名な宰相である故田中角栄元総理大臣は『日本列島改造論』にて、「現在の新幹線では最大でも300km/hが限界だ。経済成長や利便性の向上には500km/hを超えるリニアの整備が必ず必要になる」と新幹線整備の真つただ中でも次世代のことを唱えておられたと聞く。SDGs、i-Construction、DXなど横文字で表記されることが当たり前前の現代になり、昭和に生まれ育った私たちも、戸惑いながらもまだまだ活躍している世代であると空元気を出している。

令和、そしてその次の時代においても、安全・安心で心豊かな生活を送ることができる社会資本を提供する一翼を担えれば幸いである。